

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：15501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660065

研究課題名(和文) 胎児異常を告知された妊婦の情動と胎児感情—告知後から産後1か月までの縦断調査—

研究課題名(英文) The association between mothers' emotions and attachment to their unborn babies with abnormality during the time from notification about the abnormality to one month after childbirth

研究代表者

田中 満由美 (TANAKA, Mayumi)

山口大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：90285445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：胎児異常を告知された妊婦の情動と児への愛着に注目し、胎児異常の告知後から産後1か月までの妊婦(母親)の情動と対児感情の関連を明らかにすることを目的に質的研究と量的研究を行い、胎児異常の告知後から産後1か月までの妊婦(母親)の心理的変化のプロセスと対児感情の関連を明らかにすることができた。

研究協力者13名を分析の結果、「心理状態のプロセス」については、9のカテゴリーと30の概念が抽出された。対児感情については、胎児異常を告知されても異常の告知を受けていない人と同様に、分娩を機に児を肯定して受け入れようとする感情の接近感情が高まることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explore the association between mothers' emotions and attachment to their unborn babies with abnormality during the time from notification about the abnormality to one month after childbirth. Data were collected from 13 participants to analyze their psychological transitions and feelings towards the baby. Following our qualitative analysis a total of nine categories and 30 concepts on the process of psychological change and adjustment were extracted from the data. The findings suggest that for both mothers who knew about their baby and those who did not know mothers made positive attempts to accept the baby and attachment was developed.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：看護学 胎児異常 対児感情

1. 研究開始当初の背景

超音波断層法や羊水検査などの出生前診断の発達に伴い、妊娠期に胎児異常が発見される事例が増加している。また、晩婚化や生殖医療技術の進歩による高齢出産の増加(90年8.6%、00年11.8%、07年19.5%)も胎児異常の要因の1つとなっている。

母親の児への愛着形成は、妊娠の計画段階より始まり、胎動自覚などの体験をきっかけに愛着の度合いは出産に向けて上昇する。しかし、胎児異常という予想外の状況に直面した場合、児への愛着の形成は、告知前とは異なる経緯をたどることが推測される。花沢は、児への感情は、愛着的すなわち児を肯定し受容する方向の接近感情と、嫌悪的すなわち児を否定し拒否する方向の回避感情の両方が存在するとしている。胎児異常を告知された妊婦の場合、接近感情と回避感情の2つの感情がより複雑に拮抗することが予測される。

Drotarらの先天異常児を出産した母親の反応モデルによると、ショック、否認、悲しみ・怒り・不安、適応、再起という過程をたどるとされているが、これは、出産後に先天異常が発覚した際の反応を示したものであると思われる。妊娠中に胎児異常が発覚した妊婦の反応や、情動の変化などを示した研究は現在までほとんどなく、そのため、胎児異常を告知された妊婦の支援に困難さを感じている医療従事者は少なくない。また、深谷らが、Drotarらの考案したモデルは、心理的危機状況にある親の児への愛情を示していないことを指摘しているように、妊娠中に胎児異常が発覚した妊婦の児への愛着に関してまた、明らかになっていない点が多い。

2. 研究の目的

胎児異常を告知された妊婦や産褥の母親へのより質の高い看護支援をおこなうため、妊娠中に胎児異常を告知された妊婦を対象に、告知後から産後1カ月までの妊婦(母親)の情動と対児感情の関連を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：質的記述研究デザインならびに量的研究

(2) 研究実施期間：平成23年9月～平成26年3月

(3) 調査協力者(対象者)：胎児異常と診断さ

れた妊婦のうち、研究の趣旨に賛同し、協力が得られた13名

① 選択基準

・県内の産科医療施設(大学病院と県立総合病院の2施設)において、妊娠中に胎児異常の告知を受けた妊婦で、告知後から産後1カ月までの継続的な調査が可能なる者

・21トリソミー、18トリソミーなどの染色体異常

・口唇口蓋裂などの形態的異常

・先天性心疾患、消化管閉鎖などの機能的異常

除外基準

・18歳以下の若年妊婦

・精神疾患合併妊婦または主治医が精神的に研究参加が不可能と判断した事例

・死産や新生児死亡となる可能性が高い胎児異常(無脳児、potter症候群など)

・妊娠34週以降に胎児異常が告知された妊婦

(4) 調査方法：胎児異常の告知後から産後1カ月の間の、以下に示す4回の時期に縦断的に、アンケート及び面接調査を実施する。

1回目：胎児異常告知後の健診時(おおむね告知後1カ月以内)

2回目：妊娠36週前後の健診時

3回目：産後1週間以内(産後3～7日目)

4回目：産後1カ月

研究協力者の属性は質問紙より収集した。「妊娠中に胎児異常を告知された妊婦の告知後から産後1カ月までの妊婦(母親)の心理状態のプロセス」に関してはインタビューガイドを用いて1回につき20分～60分程度の半構成的面接を行い、面接内容は研究協力者の同意を得てICレコーダーに録音した。また、面接時に児への愛着を測定するため、花沢の対児感情評定尺度を用いた。

(5) インタビューガイドの内容：担当医から告知を受けた時の気持ち、その後の思い、家族と病気についてどのように話しているか、胎児(新生児)への思い等について

(6) データ分析方法：「心理状態のプロセス」に関しては修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた。(修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた縦断研究のため、得られたデータはその都度分析していった。)

対児感情は以下の評点法に従い実施した。

対児感情：愛着的感情をみる接近項目 14 項

目,否定的感情をみる回避項目14項目の計28項目で構成されている。項目は「そんなことはない」「少しそのとおり」「そのとおり」「非常にそのとおり」の4件法で評定される。0~3点のそれぞれの合計点で表す。また拮抗指数として,(回避得点/接近得点×100)を算出した。

(7) 倫理的配慮:口頭と文書で研究の説明をすると同時に山口大学医学部倫理審査委員会の審査承認を得るとともに研究協力施設の倫理委員会の審査承認も得た。

4. 研究の成果

研究協力者13名であった。研究協力者は平均年齢29.8±5.9歳、初産婦6名、経産婦7名であった。

診断時の平均週数は妊娠25週であった。研究協力者の属性は表1の通りである。

表1 対象者の属性

| 氏名 | 年齢 | 初・経 | 胎児の疾患名 | 診断週数 |
|----|----|-----|-------------------------------------|-------|
| A | 23 | PP | 腹部嚢胞、胆道閉鎖→肝嚢胞 | 妊娠25週 |
| B | 40 | PP | 胃・十二指腸閉鎖の疑い、羊水過多、18トリソミー | 妊娠26週 |
| C | 27 | MP | 水腎症 | 妊娠29週 |
| D | 39 | MP | 先天性嚢胞性腺腫様奇形(CCAM)(出生後胸腔内腫瘍 気管支肺分離症) | 妊娠18週 |
| E | 30 | MP | 口唇裂、(出生後顎裂が判明) | 妊娠26週 |
| F | 26 | MP | (胸腔内腫瘍)気管支肺分離症 | 妊娠26週 |
| G | 23 | PP | 胎児脳瘤 BEL(出生後髄膜瘤、TTTN、水頭症進行 シャント予定) | 妊娠24週 |
| H | 28 | PP | 口唇口蓋裂 | 妊娠21週 |
| I | 28 | MP | 羊水過多、18トリソミー | 妊娠30週 |
| J | 30 | MP | 脳室拡大モロー孔付近に嚢胞(出生後先天性脳実質内嚢胞、左脳室拡大) | 妊娠33週 |
| K | 24 | PP | 胆道嚢胞 or 胆道閉鎖(疑い) | 妊娠26週 |
| L | 31 | MP | 18トリソミー(疑い)、横隔膜ヘルニア(経過中、18トリソミーは否定) | 妊娠28週 |
| M | 38 | PP | 脳室拡大、二分脊椎、(出生後新たに尿道下裂と心室中隔欠損が見つかる) | 妊娠22週 |

(1) インタビューデータより、「妊娠中に胎児異常を告知された妊婦の告知後から産後1カ月までの妊婦(母親)の心理状態のプロセス」について分析した結果、衝撃、抑うつ、不安、自分を納得させる、覚悟する、喜びと安堵、親としての責任の重さを自覚、適応・再起の9つのカテゴリーと30の概念が抽出された。

妊娠中に妊婦は胎児異常の診断を受け、【信じられない】【びっくりした】【ショック】

などと、衝撃を受け、【自分を責め】【悩む】などして抑うつに襲われるとともに、不安に襲われるが、【仕方ない】【まだまし】と考え、自分の胎児が異常であったことの【意味付け】をするなどして自分を納得させる。そして【とにかく命を持って生まれてほしい】など覚悟をする。

その後の妊娠経過中には、【葛藤】【悩む】【不安】【恐怖】などの不安はあるものの、時間の経過とともに精神的に落ち着き、先の見通しや予測ができることで【少し安心】し、【気が楽になる】など不安が軽減する。経過中は安心と不安の繰り返しの中でそれなりに心理的に安定する。【仕方ない】【まだまし】と考え、自分の胎児が異常であったことの【意味付け】をするなどして自分を納得させる。【生まれて皆で乗り切ろう】【まずは生まれてきてからのこと】【良いことだけを考えよう】と覚悟する。

出産後、児の誕生という現実と直面し、出産直後は喜びと安堵の気持ちはずり起こり、不安を抱えながらも、自分の子よりも重度の他の事例と比較し、【まだまし】、【仕方ない】【自分の子だけではない】【その子なりの成長がある】と考え、生まれたことの【意味付け】を行い、自分を納得させる。

妊娠中に抱いていた予測より結果が良い場合は【気持ちが楽になる】。妊娠中に抱いていた予測より結果が悪い場合は【動揺】する。「どうしてうちの子だけが次から次にいろいろ病名が出るの」と動揺する。同時に、妊娠中に比べ、児に対する思いが多く出現し、【痛い目に合わせるのが切ない】という気持ちが出て【これ以上は何も新しい病名は出ないでほしい】という親としての切なる望みをもつ。その後、親としての責任の重さを自覚し、【吹っ切れ】て、【頑張り】【待ってるよ】という気持ちになり適応・再起していく。予測していた結果より現実の児の状態が良かった場合と予測していた結果より悪い場合では<吹っ切れる>までに要する時間は予測していた結果より悪い場合の方が時間を要す。出生後もスムーズに適応・再起するのではなく、治療法に対する【葛藤】もある。

また、一方方向に適応・再起で終了するものではなく、出生後、不安は継続していく事が明らかになった。

本研究から告知を受けた後、経過する中で、自分を納得させるということを行っていていることが明らかになった。このような心

理変化を理解した上で、看護していく事の必要性が明らかになった。

(2) 胎児異常の告知後から産後1カ月までの妊婦の対児感情について変化を明らかにすることができた。

【方法】胎児異常の告知を受けた妊婦を対象に、告知後から産後1カ月までに「心理状態のプロセス」のインタビュー実施時に4回縦断的に面接を実施した。その面接時、無記名自記式質問紙による対児感情評定尺度を用いて実施した。13名を分析対象とした。

結果、妊娠期の**接近得点**は告知後平均 25.1 ± 6.42 、妊娠36週前後平均 27.4 ± 7.46 であるのに対して産褥期は産後1週以内平均 32.6 ± 6.79 、産後1カ月平均 32.8 ± 5.95 と妊娠期に比べ有意に上昇していた。**回避得点**は妊娠期の告知後平均 7.2 ± 5.42 、妊娠36週前後平均 5.6 ± 2.41 、産褥期は産後1週以内平均 5.1 ± 3.96 、産後1カ月平均 4.8 ± 2.44 とほとんど動いていない。**拮抗指数**は告知後平均 30.0 ± 23.03 、妊娠36週前後平均 21.7 ± 9.05 であるのに対して産褥期は産後1週以内平均 17.0 ± 13.52 、産後1カ月平均 15.01 ± 7.73 であり、分娩を経て接近-回避感情の拮抗度は低下していた。

本研究により、妊娠中に胎児異常を告知された妊婦の告知後から産後1カ月までの妊婦(母親)の心理的变化と胎児異常を告知されても異常の告知を受けていない人と同様に分娩を機に児を肯定して受け入れようとする感情の接近感情が高まることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 満由美(TANAKA, Mayumi)
山口大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号: 90285445